様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２５日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９２０２００１
研究課題名（和文）　ドイツ応用倫理学の総合的研究　―「人間の尊厳」概念の明確化を目指して―
研究課題名（英文）　General research on German applied ethics for clarification of the concept of human dignity
研究代表者
加藤　泰史（KATO YASUSHI）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：９０１８３７８０

研究成果の概要（和文）：本研究の研究成果としては、（１）現代価値論の観点から「尊厳」概念を絶対的価値として基礎づけることの可能性と重要性が明らかになったこと、（２）ドイツの「人間の尊厳」理解として義務論的なハーバマスにせよ（人間の尊厳/人間の生命の尊厳）、功利主義的なビルンバッハーにしても(規範的に強い意味での尊厳/規範的に弱い意味での尊厳)、「尊厳」概念は二重構造を持っており、それが一般的に妥当性を持つとして広く受け入れられていること、しかしまた同時に（３）ドイツの「尊厳」理解において身体性を重視する議論が新たに提示され始めており、この点で従来のパラダイムが転換する可能性があること、それに対して（４）日本の「尊厳」概念史がほとんど研究されていないことが判明し、本研究でも研究の一環としてそれに取り組み、一定程度明らかになったが、その根柢には「生命の尊厳」という理解が成立しており、それはきわめて密接に身体性と関連していて、この点で（３）の論点と哲学的に関連づけることが可能であり今後の重要な哲学的課題になること、（５）「人間の尊厳」概念から「人権」概念を基礎づけることの重要性が明らかになったこと、（６）近代ヨーロッパの「尊厳」概念成立に際してヨーロッパの外部からの影響が考えられうることなどを指摘できる。これらの研究成果は、まずは『ドイツ応用倫理学研究』に掲載して公表したが（第2号まで公刊済み)、第一年度の平成19年度以降各年度に開催されたワークショップやシンポジウムの研究発表をもとにして論文集を編纂して差しあたりドイツで公刊予定（たとえば、その内のひとつとして、Gerhard Schönrich/Yasushi Kato (Hgg.), Würde als Wert, mentis Verlag が編集作業中である）である。そして、これらの論文集の翻訳は日本でも刊行を予定している。また、特に（４）に関しては、加藤/松井がこの研究プロジェクトを代表してドイツのビーレフェルト大学で開催されたワークショップ「尊厳－経験的・文化的・規範的次元」において「Bioethics in modern Japan: The case for “Dignity of *life*”」というテーマで研究発表した。さらに研究成果の一部は最終年度の平成22年度の終わりにＮＨＫ文化センター名古屋教室の協力を得て市民講座「現代倫理・「人間の尊厳」を考える」で江湖に還元することもできた。

研究成果の概要（英文）：Our research has produced the following results:

(1) From the axiological perspective, it became possible to establish “dignity” as a theoretically relevant concept and its importance was clarified.
(2) The German concept of “Menschenwürde/human dignity”, either from the perspective of the deontologist Habermas (human dignity/ dignity of human life) or the utilitarian Birnbacher (normatively strong dignity/normatively weak dignity) was clarified as having a double structure, which has also been widely accepted.
(3) While considering German “dignity,” it was found that there is a new strand emerging in the debate looking at “physicality” as an important aspect. A paradigm shift could result from this, which may become significant.
(4) Research made clear that historical studies on the concept of “dignity” in Japan have scarcely been conducted. Our research tackled this issue, and found that in Japan, “dignity of life” acts as the basis of the concept “dignity,” an idea closely connected to physicality.　Point (3) above is closely related, and this is an issue of utmost philosophical importance.
(5) The significance of laying down a foundation of “human dignity” in establishing “human rights” was clarified.

(6) Also, it was pointed out that the historical development of “dignity” in Europe might have had some non-European influences.

Some research results have been published in the *Japanisches Jahrbuch für Wissenschaft und Ethik vol.1/vol.2* (2010/2011). Also, an upcoming publication is in the editing process (Gerhard Schönrich/Yasushi Kato (Hgg.), *Würde als Wert*, mentis Verlag). Its Japanese translation is also planned. As for (4) in particular, Prof. Yasushi Kato and Prof. Keiko Matsui Gibson gave a presentation “Bioethics in Modern Japan: the case for ‘Dignity of *life*’” at Bielefeld University in Germany. Furthermore, we provided the public lecture series “Modern Ethics: Thinking of ‘human dignity’” at the NHK Culture Center in Nagoya.

交付決定額　（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	7,300,000	2,190,000	9,490,000
2008 年度	9,100,000	2,730,000	11,830,000
2009 年度	9,100,000	2,730,000	11,830,000
2010 年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
年度			
総　計	33,600,000	10,080,000	43,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：人間の尊厳、人権、価値、人格、身体性、生命の尊厳、現代ドイツ哲学、生命倫理学、環境倫理学、脳神経倫理学、グローバルエシックス、ケア倫理学、ビジネス・エシックス

１．研究開始当初の背景

日本の応用倫理学研究は、アメリカの生命倫理学の導入から始まり、その強い影響下にあったため、議論の傾向もアメリカの「パーソン」論などに限定されていたが、21 世紀になってからようやくドイツ応用倫理学の導入が本格的に始まり、「尊厳」概念などに関するより原理的な議論が導入された。しかしながら、その場合も主に生命倫理学に限定されていたので、脳神経倫理学からビジネス・エシックスにいたるまでの応用倫理学の全領域で、たとえば「尊厳」といった基礎諸概念がどのように総合的に理解されているのかは、日本でもまたドイツでもほとんど取り組まれていなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、１．で述べたような学問状況の中で、特に「人間の尊厳」という根本概念に関して脳神経倫理学からビジネス・エシックスにいたるまでのドイツの応用倫理学の各分野に即しながら、しかし同時にその全体的な方向性を検討してこの根本概念が各分野で担っている役割とその重層的な相互関係を解明した上で、それを英米圏の議論と比較・検討し、さらにそれらを日本の応用倫理学の問題状況にフィードバックして理論的貢献を目指すことである。

３．研究の方法

本研究を遂行するために、まず「ドイツ応用倫理学研究会」を立ち上げ、脳神経倫理学・生命倫理学・環境倫理学からビジネス・エシックスにいたるまでのドイツ応用倫理学の各分野に即して「人間の尊厳」概念に関わる最重要テーマを取り上げ、それを論じるに最も適したドイツの研究者たちをワークショップやシンポジウムなどに招聘し、そこでの日独両研究者（研究代表者・研究分担者・研究協力者・海外研究協力者）の研究発表・討論を通してドイツ応用倫理学の最新の最重要論点を受容・理解すると同時に、それに対して日本の研究者が批判的検討を加えることによって諸論点を共同でさらに掘り下げるという方法を採用した。その記録は『ドイツ応用倫理学研究』を創刊してそこに掲載した。

４．研究成果

本研究の研究成果としては、（１）現代価値論の観点から「尊厳」概念を絶対的価値として基礎づけることの可能性と重要性が明らかになったこと、（２）ドイツの「人間の尊厳」理解として義務論的なハーバマスにせよ（人間の尊厳/人間の生命の尊厳）、功利主義的なビルンバッハーにしても（規範的に強い意味での尊厳/規範的に弱い意味での尊厳）、「尊厳」概念は二重構造を持っており、それが一般的に妥当性を持つとして広く受け入れられていること、しかしまた同時に（３）ドイツの「尊厳」理解において身体性を重視する議論が新たに提示され始めており、この点で従来のパラダイムが転換する可能性があること、それに対して（４）日本の「尊厳」概念史がほとんど研究されていないことが判明し、本研究でも研究の一環としてそれに取り組み、一定程度明らかになったが、その根柢には「生命の尊厳」という理解が成立しており、それはきわめて密接に身体性と

関連していて、この点で（３）の論点と哲学的に関連づけることが可能であり今後の重要な哲学的課題になること、（５）「人間の尊厳」概念から「人権」概念を基礎づけることの重要性が明らかになったこと、（６）近代ヨーロッパの「尊厳」概念成立に際してヨーロッパの外部からの影響が考えられうることなどを指摘できる。これらの研究成果は、まずは『ドイツ応用倫理学研究』に掲載して公表したが（第 2 号まで公刊済み)、第一年度の平成 19 年度以降各年度に開催されたワークショップやシンポジウムの研究発表をもとにして論文集を編纂して差しあたりドイツで公刊予定（たとえば、その内のひとつとして、Gerhard Schönrich/Yasushi Kato (Hgg.), Würde als Wert, mentis Verlag が編集作業中である）である。そして、これらの論文集の翻訳は日本でも刊行を予定している。また、特に（４）に関しては、加藤/松井がこの研究プロジェクトを代表してドイツのビーレフェルト大学で開催されたワークショップ「尊厳－経験的・文化的・規範的次元」において「Bioethics in modern Japan: The case for “Dignity of *life*”」というテーマで研究発表した。さらに研究成果の一部は最終年度の平成 22 年度の終わりにＮＨＫ文化センター名古屋教室の協力を得て市民講座「現代倫理・「人間の尊厳」を考える」で江湖に還元することもできた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 36 件）

①松田純、最期を支える環境作り、日本薬剤師会雑誌、査読無、63-2、2011、177-180。
②松田純、エンハンスメントから願望実現医療へ――病気治療という医療の本義との関係、医療の本質、査読無、2011、317-336。
③Andreas Riessland、Videokonferenzen - potentielle Probleme und ihre Lösungen、アカデミア　文学・語学編、査読無、89、2011、掲載予定。
④村松聡、脳神経倫理学とメンタルな概念の問題　-責任、自由意思を巡って-、医療と倫理、査読有、9、2011、掲載予定。
⑤松田純、多文化時代における人間の尊厳、モラリア、査読無、17、2010、23-40。
⑥松田純、ドイツ事前指示法の成立とその審議過程――患者の自己決定と他者による代行解釈とのはざまで、医療・生命と倫理・社会 、査読無、9-1/2、2010、34-43。
⑦松田純、願望実現医療による医療の脱中心化、唯物論、査読無、84、2010、7-33。
⑧宮島光志、実践的幸福論としてのカント人間学、日本カント研究、査読無、11、2010、25-42。
⑨加藤泰史、現代社会における「尊厳の毀損」としての貧困への補足――CC 概念の予備的考察――、アカデミア　人文・社会科学編、査読無、91、2010、335-345。
⑩Yukio Irie、Eine Aporie der Fichteschen Wissenschaftslehre - Einige Schwierigkeiten mit der intelletuellen Anschauung、Fichte-Studien、査読有、35、2010、 329-337。
⑪入江幸男、内在的基礎づけ主義とドイツ観念論、ヘーゲル研究、査読無、16、2010、70-81。
⑫舟場保之、Was bedeutet die Aussage >Die Maxime verträgt sich nicht mit der Publizität<?、Philosophia Osaka、査読有、5、2010、97-106。
⑬山内廣隆、和解のために－東アジア共同体とヨーロッパ連－、ぷらくしす、査読有、11、2010、1-10。
⑭入江幸男、A Proof of Collingwood’s Thesis、Philosophia Osaka、査読無、4、2009、69-83。
⑮高田純、カント実践哲学の生命倫理学的射程（上)、札幌大学外国語学部紀要「文化と言語」、査読有、71、2009、125-163。
⑯加藤泰史、現代社会における「尊厳の毀損」としての貧困――格差・平等・国家へのカント的アプローチ――、日本哲学会『哲学』、査読無、60、2009、9-31。
⑰青山治城、日本国憲法の最高法規性－高橋氏への応答－、法の理論、査読無、26 号、2009、199-202。
⑱直江清隆、創造と受容(2)、思索、査読有、42、2009、1-19。
⑲松田純、サイボーグ化の先にあるもの――境界と人間像をめぐる問い、文化と哲学、査読有、26、2009、73-86。
⑳入江幸男、『意識の事実』(1810)における諸自我と普遍的思考、フィヒテ研究、査読無、16、2008、123-132。
㉑山内廣隆、ヘーゲル政治哲学の現代的意義、政治哲学、査読有、8、2009、38-62。
㉒Yasuyuki Funaba、Kann Gender philosophisch diskutiert werden?、Philosophia Osaka、査読有、3、2008、51-63。
㉓高田純、承認・正義・再分配（上)、札幌大学総合論叢、査読有、26、2008、1-20。
㉔Yukio Irie、What’s Going on, When We Share Knowledge?、Philosophia Osaka、査読無、3、2008、37-54。
㉕山内廣隆、ルートヴィヒ・ジープと Konkrete Ethik、ぷらくしす、査読無、9、2008、1-4。
㉖加藤泰史、カントと愛国心―パトリオティズムとコスモポリタニズムの間―、日本カント研究、査読有、8、2007、85-105。
㉗加藤泰史、「二重の周縁から見通すこと」

の哲学、日本の哲学、査読無、21、2007、103-112。
㉘山田秀、伝統的自然法論の精華―ヨハネス・メスナー晩年の著作を中心に―、社会と倫理、査読無、21、2007、77-111。
㉙山田秀、「善さ」を志向する人間本性―村井実博士の自然法論的教育思想―、南山法学、査読無、31、2007、49-84。
㉚山内廣隆、相互人格的承認を超えて―ジープの新しい承認論構想―、政治哲学、査読無、6、2007、54-60。
㉛宮島光志、カントの人間学講義とクニッゲの『人間交際術』―埋もれた「エゴイズム」概念をめぐって、ドイツ語文化圏研究、査読有、5、2007、19-37。
㉜川村和美・松田純、薬剤師のモラルディレンマ　第１回 調剤過誤を発見したとき、薬局、査読無、2008年1月号、2007、109-113。
㉝川村和美・松田純、薬剤師のモラルディレンマ　第２回　大量の残薬が発覚したとき、薬局、査読無、2008年2月号、2007、126-129。
㉞舟場保之、ジェンダーは哲学の問題とはなりえないのか、哲学、査読無、58、2007、61-78。
㉟舟場保之、カントによる死刑制度擁護論からの抜け道を求めて、倫理学研究、査読有、37、2007、16-24。
㊱高田純、カントの教育学講義――「自然素質の調和的発達」をめぐって、文化と言語、査読有、67、2007、181-241。

〔学会発表〕（計45件）

①松田純、生老病苦に科学技術は勝てるか？願望実現医療―人間改良時代の到来、NHK文化センター「人間の尊厳」講座、2011年3月30日、NHK文化センター名古屋教室。
② Jun Matsuda、Menschenwürde und traditionelle japanische Lebensanschauung、Workshop: ″Leben, Sterben und Menschenwürde - ein deutsch-japanischer Workshop″、2011年3月3日、デュッセルドルフ大学（ドイツ）
③直江清隆、技術者倫理から技術の倫理へ、日本技術士会中部支部技術者倫理研究会、2011年1月15日、中日本建設コンサルタント（名古屋）
④松田純、人間の尊厳と日本の伝統的な生命観、南山大学地域研究センター共同研究「ボローニャプロセス以後の欧米を中心とした大学制度の変貌と新しい学問状況」、2011年1月8日、南山大学（名古屋）
⑤松田純、検証　生命操作の現在、静岡大学開学60周年記念公開シンポジウム第６回「いま再び<いのち>を考える」、2010年12月18日、静岡市産学交流センター
⑥Yukio Irie、How Is It Possible to Imitate Unconsciously a Desire of Another Person?、第二回IMITATIO、2010年12月18日、国際キリスト教大学
⑦松田純、願望実現医療――医療の変貌、からつ塾、2010年11月15日、唐津ビジネスカレッジ（佐賀県）
⑧松田純、いのちをめぐる倫理、岡大学・読売新聞連続市民講座「未来につなぐ食と健康」第7回、2010年11月6日、静岡市産学交流センター
⑨村松聡、包括同意を巡って-Informed Consent の拡張の是非とその取り扱い-、第29回日本医学哲学・倫理学会、2010年10月17日、岩手医科大学
⑩Yukio Irie、“Was ist eine moralische Frage? -- Ein „dichtes“ moralisches Wort und die Würde des Menschen --“、第25回ドイツ応用倫理学研究会　国際シンポジウム「尊厳と価値」、2010年9月14日、南山大学（名古屋）
⑪Jun Matsuda、Menschenwürde und Japan、第25回ドイツ応用倫理学研究会　国際シンポジウム「尊厳と価値」、2010年9月11日、南山大学（名古屋）
⑫直江清隆、人工物の設計と工学知、第9回日本科学技術社会論学会、2010年8月29日、東京大学
⑬ Yasuyuki Funaba、Der performative Widerspruch und die Verantwortung als Fähigkeit zur Antwort(response-ability)、4. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium Europazentrum der Waseda-Universität、2010年8月27日、Bonn, GERMANY
⑭松田純、願望実現医療の隆盛――医療の脱中心化、社会理論研究会、2010年7月10日、東洋大学
⑮松田純、東大医科研附属病院事件判決の意味 ――倫理学的視点から、講演、2010年5月21日、藤枝市立総合病院（静岡県）
⑯直江清隆、哲学の中の技術の知識・認識論、第2回応用哲学会、2010年4月25日、北海道大学
⑰松田純、薬剤師の役割変化と新しい倫理教育、日仏薬学会、2010年4月17日、日仏会館（東京）
⑱宮島光志、実践的幸福論としてのカント人間学、日本カント協会第34回学会、2009年11月21日、立正大学（東京都）
⑲直江清隆、技術論の新たな構築に向けて：日本の技術論の再評価と技術哲学、日本科学技術社会論学会、2009年11月14日、早稲田大学（東京都）
⑳松田純、医療薬学の目的とエンハンスメント、東北哲学会第59回大会、2009年10月25日、新潟大学脳研究所(新潟県)
㉑Yasushi Kato、Kant und Fichte über das Konzept des ewigen Friedens、The VII

International Fichte Kongress、2009年10月9日、王立アカデミー（ベルギー・ブリュッセル）

㉒ 入江幸男、Die Möglichkeit des kollektiven Wissens bei Fichte、The VII International Fichte Kongress、2009年10月9日、王立アカデミー（ベルギー・ブリュッセル）

㉓高田純、Umweltethische Umdeutung des Kantischen Denkens、Tagung Umweltethik mit dem Schwerpunkt :das Konzept Menschenwürde、2009年9月12日、南山大学名古屋キャンパス（名古屋）

㉔ ギブソン松井佳子、Reconceptualizing Autonoy/Care and Public/Private ― Can the Ethics of Care Become a Global Ethics?―、Tagung Feministische Ethik mit dem Schwerpunkt:das Konzept Menschenwürde oder Zwischen Sorge und Autonomie、2009年9月2日、南山大学名古屋キャンパス（名古屋）

㉕ Yasuyuki Funaba、Was bedeutet die Aussage>Die Maxime verträgt sich nicht mit der Publizität<? 、Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium、2009年8月21日、Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY

㉖山内廣隆、和解のために－第二回日中哲学フォーラム報告、第7回広島大学応用倫理学プロジェクトセンター、2009年8月6日、広島大学（広島県）

㉗村松聡、先端技術が私たちに問いかけるもの　哲学への挑戦-人間観と幸福の問い-、第三回　学習院大学西洋哲学研究会（三宅アーベント）、2009年5月30日、学習院大学（東京都）

㉘加藤泰史、現代社会における「尊厳の毀損」としての貧困、第68回日本哲学会大会、2009年5月16日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都）

㉙山内廣隆、新冷戦と国家連合、第六回応用倫理学プロジェクト研究センター例会、2008年12月23日、広島大学（広島）

㉚宮島光志、生命倫理教育の基本ツールとしての「ＷＭＡ　医の倫理マニュアル」、日本生命倫理学会第２０回年次大会、2008年11月30日、九州大学（福岡県）

㉛ Yasuyuki Funaba、Der Gemeinspruch von der Philosophie zurückgewiesen werden、Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium、2008年9月9日、Bonn, GERMANY

㉜ Makoto Takada、Beyond Anthropocentrism and No-anthropocentrism in Environmental Ethics、XXII World Congress of Philosophy、2008年8月8日、Seoul National University

㉝入江幸男、‘Our’ Practical Knowledge、The XXII World congress of Philosophy、2008年8月5日、Seoul National University

㉞ Yasuyuki Funaba、Die kantische Philosophie aus der Sicht der kommunikativen Rationalität、Deutsch-japanisches Kant-Kolloquium、2008年1月19日、Johann Wolfgang Goethe-Universität,Frankfurt,GERMANY

㉟松田純、エンハンスメントと脳科学技術、文部科学省　平成19年度 科学技術振興調整費「意識の先端的脳科学がもたらす倫理的・社会的・宗教的影響の調査研究」研究会、2007年12月2日、京都大学（京都）

㊱青山治城、現象学と社会学：あるいは哲学と科学、日本現象学・社会科学会、2007年12月2日、龍谷大学

㊲ Yasuyuki Funaba、Wie sollen Normengeltungen diskutiert werden?、Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium -- Ethik im Zeitalter der Globalisierung、2007年11月23日、Europazentrum der Waseda-Universität,Bonn,GERMANY

㊳大橋容一郎、教育勅語の倫理、日本倫理学会、2007年10月12日、新潟大学（新潟）

㊴松田純、薬剤師の倫理トレーニングに活かすリベラル・アーツ、第17回日本医療薬学会年会シンポジウム、2007年9月30日、前橋テルサ（群馬県）

㊵Hideshi Yamada、Mensch und Naturrecht in Entwicklung aus Sicht eines japanischen Naturrechtlers、8. internationales Symposium der Johannes-Messner Gesellschaft „Mensch und Naturrecht in Entwicklung“、2007年9月22日、Mödling bei Wien, Österreich

㊶松田純、遺伝子によるエンハンスメント、日本人類遺伝学会第52回大会シンポジウム、2007年9月13日、京王プラザ（東京）

㊷青山治城、Die Phänomenologie der gesellschaftlichen Selbstbeobachtung：Die Selbstbeobachtung und Selbstbeschreibung bei Luhmann、国際応用現象学会議、2007年9月8日、立命館大学

㊸ Yukio Irie、Contradiction in the Question- Answer Relation、The 13th International Congress of Logic Methodology and Philosophy of Science、2007年8月11日、Beijing Friendship Hotel（中国）

㊹山内廣隆、ジープとKonkrete Ethik、広島大学応用倫理学プロジェクト第三回例会シンポジウム、2007年7月15日、広島大学（広島県）

㊺舟場保之、ジェンダーは哲学の問題とはなりえないのか、日本哲学会第66回大会、2007年5月19日、千葉大学（千葉県）

〔図書〕（計 14 件）

①松田純・他、くすりの小箱、南山堂、2011予定。

②篠澤和久・馬渕浩二（編著）、ナカニシヤ出版、倫理学の地図、2010、312。

③ギブソン松井佳子・仲正昌樹編、自由と自立、御茶の水書房、2010、245-272。

④別所良美、ケアの倫理とジェンダー、越境するジェンダー研究、明石書店、2010、90-135。

⑤松田純・直江清隆・他、薬学生のための医療倫理、丸善、2010、248。

⑥大橋容一郎・他、叡智を生きる、Sophia University Press、2010、61-76, 163-172。

⑦山田秀・山崎広道編、法と政策をめぐる現代的変容、成文堂、2010、181-217。

⑧入江幸男・木村博編、フィヒテ―『全知識学の基礎』と政治的なもの―、創風社、2010、267-300。

⑨松田純・他、南山堂、薬剤師のモラルディレンマ、2010、220。

⑩入江幸男・加藤泰史・他、ミネルヴァ書房、グローバルエシックス、2009、202（入江:151-176、加藤:65-92)。

⑪直江清隆、高橋隆雄・条和彦編、九州大学出版会、『生命という価値 その本質を問う』、2009、334（128-146)。

⑫寺田俊郎・舟場保之(編)、梓出版、グローバル・エシックスを考える「九・一一」後の世界と倫理、2008、330。

⑬ギブソン松井佳子・仲正昌樹編、歴史における「理論」と「現実」、御茶の水書房、2008、173-194。

⑭山内廣隆・他、ナカニシヤ出版、環境倫理の新展開、2007、108-133。

〔その他〕

ホームページ等

http://moodlefg.nanzan-u.ac.jp/moodle/

６．研究組織

(1)研究代表者

加藤　泰史（KATO YASUSHI）
南山大学・外国語学部・教授
研究者番号：90183780

(2)研究分担者

青山　治城（AOYAMA HARUKI）
神田外語大学・外国語学部・教授
研究者番号：40192869

入江　幸男（IRIE YUKIO）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：70160075

大橋　容一郎（OHASHI YOUICHIRO）
上智大学・文学部・教授
研究者番号：10223926

篠澤　和久（SHINOZAWA KAZUHISA）
東北大学・情報科学研究科・准教授
研究者番号：20211956

直江　清隆（NAOE KIYOTAKA）
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：30312169

舟場　保之（FUNABA YASUYUKI）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：20379217

別所　良美（BESSYO YOSHIMI）
名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：10219149

松井　佳子（MATUI KEIKO）
神田外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：60255180

松田　純（MATUDA JUN）
静岡大学・人文学部・教授
研究者番号：30125679

宮島　光志（MIYAJIMA MITUSHI）
福井大学・医学部・准教授
研究者番号 00423822

村松　聡（MURAMATU AKIRA）
横浜市立大学・国際総合科学研究科・准教授
研究者番号：00423822

山内　廣隆（YAMAUCHI HIROTAKA）
広島大学・文学研究科・教授
研究者番号：20239841

山田　秀（YAMADA HIDESHI）
熊本大学・法学部・教授
研究者番号：60191326

高田　純（TAKADA MAKOTO）
札幌大学・外国語学部・教授
研究者番号：10111197

Riessland Andreas
南山大学・外国語学部・准教授
研究者番号：50384717

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：